

‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις. ὁ βίος, ὑπόληψις.’

98号 1995.6.12

文・編集・発行

恋 怪子

WORDS: JOE Escalante (VANDALSのVo. 「DOLL 1995年3月号」)

「一番ははっきりしているのは、今バンクになる子っていうのは、“僕は今日からバンクになるから、あのグループの人達と一緒に昼を食べるんだ。それでバンクの格好した女の子たちと一緒に出掛けて、バンクの格好したあの男の子たちと一緒にブラブラするんだ”って感じだろ。でも昔はバンクになるってのは、“俺は誰ともつるまない。まわりにバンクの奴なんかほかにいないから。俺は変わった奴なんだ。女といちゃつくなんてできないし、友達もいない。幼なじみだった奴らもダサくていまさらつきあえない”ってことだ」

—— 誰とも付き合わないんだっつたら、どうやってバンド組むの？メンバー同士憎み合ってるの？

「学校から離れたところへ行くんだよ。もしHuntington Beachに住んでるんだっつたら、ビーチやなんか行ってうろついてみればいい。でも今は“僕もバンク・グループに入ろう”だろ。うらやましいね。バンク・グループに入るってのはクールなことだもんな。でもあの当時バンクっていうのは誰彼かまわず“Fuck You”って言って、“俺ははみ出し者。誰ともつるまねーよ”っていう存在だったから、学校では浮いちゃって、そのうち袋たたきにされたりしたんだよ」

「若いときはバンクは人生そのものだったけど、今は本気で“Fuck You”って言える対象がないね。状況が昔とは大きく違うし。バンク・ロックなんてありふれたものになっちゃった。それに社会に対して“Fuck You”って言うって人間もあまりに多い。バンク・ロックはもうオリジナルでもクールでもないし、面白くもなんともないよ」

「バンクになったとき、音楽も社会もみんながやっつてることすべてが腐ってると思った。今も腐ってると思うことは沢山あるけど、もっとイージーになったと思う。バンクもメイン・ストリームになって簡単に手に入る」

—— 今のメイン・ストリームの一部はバンクで育った人間が占めているから、それで裾野が広がったっていうのはある。

「だからみんなバンクになる。いいことだと思うし、バンクは最高の音楽だと思う。でも僕たちの時とはやっぱり違う。僕たちはすべてを拒絶したからバンクになった。今は拒絶じゃなくてバンクに“参加”するんだ。どこに属するか選ぶことができる。必然じゃないんだよ」

去年の11月、広島WOODY STREETでのストリート・ビーツのライブに行ったとき、開場前に隣に並んでいたファンの女の子と話をしていた。新宿ロフト存続についての話になった。その子は存続署名活動をしているとのことなので、私は87号(1994.6.27 期)と95号(1995.1.10 期)に書いたとおり現在のロフトならなくなってもいいと思っているから、そう言うってチラシを渡そうとしたら、自分はロフト存続の立場だから、なくなってもいいという反対意見は聞く気もないし、書いたものも読む気はないという。私が、考えがちがってもまず聞く耳はもって、受け入れるものは受け入れるということが大切なんじゃないの？とか、反対意見の私を説得しようとしないの？とか、話しても、それこそ聞く耳をもたないっていう態度。そして、ストリート・ビーツの他にどんなバンドが好きなのかと聞くと、「アナーキー、THE MODS、横道坊主」とハンでおしたような答え。こういう考えの子はストリート・ビーツのどこが好きなんだろう？昔のアナーキーならまだしも、THE MODSや横道坊主とストリート・ビーツをどうしておなじように好きになれるんだろう？なんてなんだろう？

上記の、VANDALSのJoe Escalanteのインタビューを読んでそのわけがわかった。あの女の子はJoe Escalanteが言っているバンクに“参加”しているということなのだ。アナーキー、THE MODS、横道坊主、ストリート・ビーツなどを一つの“バンク・ロック・グループ”にして、それに“属する”ことを“選んで”いるということなのだ。ストリート・ビーツが“必然”というわけじゃないんだ。そういうことなんだ。

バンドマンたちも何かのグループに属し、聴く人たちも何かのグループに属す。それぞれつるむ相手がいるっていうことだ。Joe Escalanteの言っているように人生が“イージー”なことだ。“誰ともつるまないで”「個」でいなければ“必然”はありえない。私がストリート・ビーツを好きなのは、ストリート・ビーツでしか聴くことのできない、音(サウンド)をやってるからだし、だから必然ということになるのだが、いつでも「個」でいるバンドだからなんだ。

このときのライブ(1994.11.5,11.6)では、OKIとやりあうのではなくOKIをうのみにしそうな感じが観客のなかにあったし、OKIも観客とやりあっていた。今回のツアーは「10YEARS & NEXT」というのだが、10YEARSということや広島でのライブということで、OKIにも観客にもそういう特別な、記念碑的なこととしての盛り上がりばかりが強くて、現在もNEXTも感じられないライブだった。OKIには観客とやりあって、ぶっちぎってほしいと思った。浅い部分での共感、一時的な、すぐに消えてしまうような効き目しかないから。

LIVE: THE STREET BEATS 1995.2.24 2.25 新宿ロフト

2月24日
「少年の日」というようなとても長くやっている曲も、いちばん新しい曲も同じく現在の曲になっていた。「DON'T BE COOL」ではボサッとしている自分を見せられたし、「GOD BLESS YOU」では泣いた。この頃はしきりと骨をガリガリかじるような実感を欲しがっていたけれど、そういうものではなかったけれど、心にしみいつてきた。去年11月の広島のライブで、私たちをぶっちぎって欲しいと思ったことが実現したようでうれしかった。

OKIは「一度むけた」って言った。私もそう思った。
2月25日
この日、昼の部でOKIのアコースティック・ソロのライブがあって、聴きごたえがあった。はじめて聴く「路上の鼓動」で歌のなかにその「路上の鼓動」という歌詞を聴いて衝撃をうけた。なぜって、しばらく前にストリート・ビーツのことを考えていたとき「ストリート、うん、路上だよ。ビーツ、それは鼓動っていうことだ。ああ、ストリート・ビーツって路上の鼓動というわけか……。うん、びったりじゃないか」って思ったから。歌のあとでOKIが「路上の鼓動」。10年目でこれができた”っていうのを聞いて、やっぱり信じたものを信じつづけようって心からそう思った。

夜の部のほうはちっともよくなって、アンコールがはじまってすぐにロフトを出て、友人が出てくるまで外で待つことにした。最近、頭にタオルを巻いた坊主頭の男の子たちがよくストリート・ビーツのライブに来るのだが、演奏をちゃんと聴いているとは思えないほど暴れ方がひどい。ライブがいいと気にならないのだが、つまらないとそういう子たちにイライラさせられる。

ライブが終わったあと、友人(「STAY OR GO」というロックのチラシを発行しているSUMIKOさん)は怒りがおさまらない様子で、ロフト脇の駐車場で我がもの顔で罵っているその坊主頭の連中にむかって、「お前ら、金返せよーっ」ってどなっていた。

そのあとSUMIKOさんとコーヒー屋にはいって話をした。「あの子たちに金返してもらった気がすむ？」ってきくと、「ううん、すまない」。そうだろう。ライブがつまらなかったのは、あの子たちのせいではなくて、この日のストリート・ビーツに力がなかったからなのだから。私はチケット代はそこに入るための入場料として払っているのであって、ライブの中味に払っているつもりはない。だから、高い金払ったんだからそれだけいいライブをやれとも、つまらなかったら金損したとも金返せとも思わないし、無料ライブで金払ってないからといって中味はどうでもいいとも思わない。金と中味は関係ない。この日もライブのあと「4000円なんて、ビーツも外タレ並みの金よくとるよ」とあたりかまわず大声でしゃべっている女がいたが、中味はあの坊主頭の連中とおなじだ。

CD: THE STREET BEATS「SPIRITUAL LIFE」



前作「ワイルドサイドの友へ」からちょうど1年。ストリート・ビーツはまた大きく変化した。とくにSEIZIのギターが変わった。OKIはいいたいことをあれもこれも全て歌っているようだ。「悪魔と踊れ」と「いのちの音」はちょっと歌詞が浅い感じがするし、「CLUB THE COOL JAM」は「？」って思うけど「街の灯」「GOD BLESS YOU」「路上の鼓動」はすばらしい。ストリート・ビーツは10年目で新しいスタートを切った。

LIVE: THE STREET BEATS 1995.5.27 新宿パワーステーション

横道坊主、DOG FIGHTとのイベントで演奏時間が短かったし、ベースがエンリケという人に変っていたけれど、すばらしいライブだった。CDの感想に「歌詞が浅い感じがする」って書いた「悪魔と踊れ」もライブだと説得力がある。この日は、ストリート・ビーツで今いちばん好きな歌「GOD BLESS YOU」につづいて「ワイルドサイドの友へ」を聴くことができてうれしかった。

それから、左記の「WORD: Joe Escalante」で「誰ともつるまないで」「個」でいなければ“必然”はありえない”って書いたけれど、OKIもでこう歌っているじゃないか。「群れから離れるのをそんなに恐れる事はない/そこにある世界がすべてじゃない」(「存在」)、「I say I'm zero, I'm nothing/どこにも混じらない/I say I'm zero, I'm nothing/誰にも縛られない」(「ZERO」)って。